

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成25年 9月19日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 理学研究科

職 名・学 年 博士課程2年

氏 名 寺 田 佐 恵 子

助 成 の 種 類	平成25年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	第11回国際生態学会		
発 表 題 目	ボノボの生息地利用パターンに植生の異質性が与える影響		
開 催 場 所	英国ロンドン市内エクセル国際会議場		
渡 航 期 間	平成25年8月16日 ～ 平成25年8月26日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	200,000 円	
	使用した助成金額	200,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	以下の渡航費(計212,700円)の一部	
		航空賃	135,500 円
		燃油サーチャージ	51,600 円
現地出入国税等		23,060 円	
	国内空港使用料	2,540 円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 本助成金なしでは、欧州で開催される本学会に参加するための旅費を捻出することは極めて困難であり、大変感謝しています。研究計画がより具体的になる当該年度に入ってから応募が可能な第Ⅱ期募集の存在も、ありがたいものでした。このように実績の少ない学生が国際的な学術交流の場に参加するための助成は大変貴重であり、今後の継続を願っております。		

成 果 の 概 要

理学研究科博士課程 2 年

寺田 佐恵子

1. 研究集会の概要

報告者は、2013 年 8 月 18 日から 23 日に英国ロンドン市で開催された第 11 回国際生態学会 (The 11th Congress of the International Association for Ecology) に参加し、ポスター発表を行った。国際生態学会 (INTECOL) は、1967 年に設立された各国または地域の生態学会の連合組織である。2013 年現在、24 の生態学会が加盟し、会員数は 101 カ国・約 2400 名に及ぶ非常に大きな学術団体である。研究対象には、陸域・水域を問わずあらゆる生態系における、物質レベルから地球規模まで様々なレベルで、またフィールドワークや実験から数理まで様々なアプローチによるあらゆる生態学の研究が含まれる。INTECOL は、生態学の発展とその国際的な環境問題への応用に向けた研究者間の連携を一つの目的としており、近年、気候変動、生物多様性の損失、生態系サービスの維持などに関する発見と課題解決への貢献が生態学に期待される中、それらの社会的ニーズに応えることも学会及び生態学者の使命として認識されている。

INTECOL による学術発表のための国際学会は 4 年に一度開催され、世界各国から数千名が参加する。今回の第 11 回大会 INTECOL 2013 は、イギリス生態学会がホストを務め、1000 件以上の口頭発表と 600 件以上のポスター発表が行われた。口頭発表は、通常のセッションと特定のテーマに資する 40 以上のシンポジウムセッションの二つから構成された。発表数が多いため、17 のセッションが同時に実施された。さらに、11 名の著名な研究者による基調講演や 30 以上のワークショップ、イギリス生態学会 100 周年の記念式典も実施された。参加者は、欧州を中心に欧米やその他先進国の研究者が多く、日本の様々な研究機関・大学からは報告者が認識した限りでも数十名は参加していたようであった。また、限定的ではあったが途上国からの参加者も見受けられ、これらの国々からの参加者に対する INTECOL からの参加費支援も報告されていた。

2. 発表の成果

報告者は、8 月 19 日及び 20 日に「ボノボの生息地利用に植生の異質性が与える影響 Effects of vegetation heterogeneity on the habitat use of bonobo (*Pan paniscus*) in Congo Basin」と題するポスター発表を行った。内容は、アフリカのコンゴ盆地に生息する大型類人猿であるボノボが、原生林・二次林・湿地林の混成した生息地を通年でどのように利用しているかをボノボのグループ追跡によって明らかにし、異なる森林タイプという植生の異質性がボノボの生息地利用パターンに与える影響を考察したものである。これまでのボノボを含む大型類人猿の生息地利用に関する研究は寝床の数からの推定または短期間の個体の行動観察が多く、本研究は、ボノボの生息地利用パターンを、長期間に亘る連続的な定量データによって示した最初の報告である。今回の発表では、これまでボノボは原生林を好むと考えられてきたが、同時に二次林や湿地林を遊動や採食の場所として低頻度ながら効果的に利用していることが示唆され、

保全への応用としてこれらの森林タイプの生息地適性の再検討の必要性を述べた。

この発表を本集会でやる背景として、国内の学会では数少ないアフリカ大陸や海外の野生哺乳類を対象とする生態学者や、対象種に関わらず行動・空間・景観・保全など本研究の発展に関する様々な分野の専門性を有する研究者の率直な見解を聞いてみたいという思いがあった。発表にあたっては、近年、複雑な種間関係を考慮した研究や広域スケールでの研究が発展していく中で、報告者のような若手学生の特定の種を対象とした研究発表に足を止めてくれる人は少ないのではないかと懸念があった。しかし、実際には2日とも発表時間一杯、様々な研究者が足を止めてくださり、アフリカという地域、熱帯林または霊長類という研究対象、保全への応用、GPSや衛星画像など手法など、様々な切り口から関心を得ることができたようだった。多様な分野の知見や技術が必要であるという点は、本研究を深めていく醍醐味でもあり難しさを感じる点でもあるので、国際学会の場で各分野の研究者に少なからず関心を得られたことは励みになった。またコメントとして、生息地の植生タイプや餌資源の定量化、採食物のより定量的な評価、遊動GPSの解析手法の発展などの必要性を指摘いただいた。これらのコメントは、自身で検討していた今後の研究の発展と重なる点が多く、具体的に活かしていきたい。今回の経験を元に、今後自身の研究の売りになる部分をより明確にするとともに、基礎としても保全への応用としても意義のある研究ができるよう努力したい。

3. 所感及び謝辞

本集会では、申請者の想像以上に、理論の構築や実証などの基礎研究に対して、生物多様性や生態系の保全に関する応用研究の発表が多く、さらに政策提言や国際的な他業界との連携にまで踏み込んだ議論や提案がなされていた点が印象的であった。また、基調講演では、各分野の世界的に著名な研究者がこれまでの研究の集大成や最新の報告を大変わかりやすく、かつユーモアにあふれた発表で披露してくださり、知識や視点が広がるとともに大変感激した。また、海外の研究機関で活躍される諸先輩方との再会や、国内の若手学生との会場での出会いにも刺激を受けた。

最後に、本助成により、世界における学問の潮流を認識し、様々な分野の研究者の方々と議論する機会を得ることができました。心より感謝申し上げます。